

2019年度 生活科実践・研究計画

部 員 ○渡部 誠一郎，嶋崎 裕子

研究テーマ

対象に主体的に関わり続けながら，
気付きを深めていく子どもを育む学び

1 研究テーマについて

生活科では、研究主題の「自律した学習者」を、自分なりの思いや願いをもって対象に主体的に関わり続けながら、対象や自分自身への気付きを深めていく子どもと捉える。また、研究副題の「学びをつなぐ」ことを、互いの気付きを交流することを通して、次の活動への思いや願いが生まれることと捉える。「小学校学習指導要領解説 生活編」において「気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる。」と示されている。子どもは、友達の気付きにふれることで自分の気付きを見つめ直す。それによって対象に対して新たな気付きや疑問が子どもの中から生まれてくる。それは、次の活動や体験への思いや願いとなり、子どもの主体的な活動の原動力となるものと考えられる。

生活科では研究テーマを昨年度に引き続き、「対象に主体的に関わり続けながら、気付きを深めていく子どもを育む学び」とした。「対象に主体的に関わり続ける」とは、自分の思いや願いの実現に向けて、自分なりの方法で試行錯誤を重ねながら繰り返し対象に働きかけていくことと考える。また、「気付きを深めていく」とは、対象へ働きかけていく中で、以前よりも対象について詳しくなったり、対象との関係がより深まったりした自分自身に気付いていくことと考える。

昨年度の実践では、「対象へ働きかける」→「自分の関わり方をふり返る」→「新たな関わり方を考える」→「対象へ働きかける」→・・・というサイクルを繰り返す単元を構成したこと、単元全体の目的を子どもたちに明確にもたせたことで、学びのつながりを意識し、主体的に対象に関わる子どもの姿が見られた。

一方で、「自分の関わり方をふり返る」活動において、自分の課題解決の状況を正しく捉えるという面では課題が残った。これまでの実践では、省察の場を一単位時間や単元全体の終末に位置付けるに留まっていたため、省察の効果や成果を子どもに十分に実感させることができなかった。そのため、省察を行う目的を見いだせず、自分の学びをしっかりと見つめることができないでいる子どもが見られた。省察を行う目的を知り、その効果や成果を実感することができれば、自分の学習過程に対する自覚を高めることができる。低学年なりに自分の学習過程を問い続ける省察の在り方を探っていく必要がある。また、生活科で身に付けさせたい「見方・考え方」、つまり、身近な生活を捉え、対象と自分がどのように関わっているのか、という視点は、学習者自身の経験として積み重ねていくことで根付かせることができる力である。課題解決で働かせた「見方・考え方」を子どもに根付かせ、活用できる力として子ども自身から発揮できるような学習活動については今後も検証を重ねていく必要がある。そこで、今年度も研究テーマを継続し、子ども自身が「何を・どのように学ぶのか」を自覚できる授業づくりを目指していきたい。

生活科における「学びをつなぎ、資質・能力を高めていく子どもの姿」を次のように捉える。

- ・自分の活動や対象との関係を見つめ直し、そこから次の活動や体験への思いや願いを新たにもっている姿
- ・自分の思いや願いをもとに、自分の活動の目標や目的を明確にもって対象に向き合おうとしている姿
- ・自分と友達の気付きを共有し、比べたり、関連付けたりすることを通して、自分の気付きをさらに深めようとしている姿

2 研究の重点

(1) 子どもが自分の心の動きを表出し、自らの関わり方の現状を認識できる省察の場の充実

対象に主体的に関わり続ける学びを展開するにあたって、子どもが対象への思いや願いをもとに、対象にどのように関わるのか、自らの関わり方についての見通しを子ども自身が具体的にもっていることが大切であると考え。そのためには、自分の関わり方について省察し、自分の関わり方の現状を認識できていることが必要である。その上で子どもは自分の次の関わり方をふり返って、活動の見通しをもつ。子どもは自らの心を動かすような対象との関わりがあると、言葉や絵、表情、体全体で表現し始める。自己を表出し合う中で、自分の関わり方のよさや問題点などに気付いたり、他者の関わり方に目を向けたりする。そこで、教師は、子どもが自分の心の動きを表出できるような省察の方法を工夫するとともに、個々の課題解決の状況に合った問いかけや問い返しを行い、省察の場の充実を図る。子どもが自分の関わり方の現状を認識できるようにすることで、次はどのように対象に関わるのか具体的にイメージすることができると考える。

(2) 主体的に考え判断しながら対象に関わる力を高めるための伝え合い交流する場の設定

子どもは、対象と関わる中で「もっと～したい」「～なのはどうしてかな」という思いや願い、疑問が生まれてきたり、「なぜうまくいかないのだろう」といった悩みを抱えたりすることがある。教師は子どもの活動状況や振り返りから、対象への気付きをより深めることができる思いや願い、疑問、対象と関わる中で生まれた悩みや問題点等を洗い出し、全体の場で取り上げる。そして、子どもが解決の見通しをもつことができるように、個々の気付きを他者と伝え合い交流する場を設ける。そこで子どもは、問題を解決する手がかりを得たり、自らの関わり方を見直したりする。対象を自分との関わりで捉えていた子どもが、他者の気付きを捉える際に働かせた比較、分類、関連付け、試行、予測、工夫という「見方・考え方」を、教師は意図的に価値付けていく。そうすることで子どもに「このようにして解決できるのか」と「見方・考え方」を意識付けることができる。その後も体験活動と表現活動が繰り返し展開していく単元の中で、思いや願いを基に思考する活動を積み重ねていく。そうすることで、問題に応じてどのような「見方・考え方」を生かして解決したらよいのか、主体的に考え判断しながら対象に関わっていく力を育むことができると考える。

3 研究・研修計画

| 時 期 | 主な研究・研修行事 | 研究・研修内容 |
|------|--|---|
| 1 学期 | <ul style="list-style-type: none"> ・教科部会 ・附属小学校公開研究協議会 (6/7) 提案授業 嶋崎：2 B ・附属幼稚園公開研究協議会 (6/27) | <ul style="list-style-type: none"> ・実践・研究計画の検討 ・授業づくり、授業力向上 ・授業を通して重点事項の検証 |
| 2 学期 | <ul style="list-style-type: none"> ・研究パンフレット原稿執筆 ・教科部会 ・東北附連研究集会 (10/31) 提案授業 渡部：2 A ・幼小連携相互乗り入れ授業 提案授業 ・附属幼稚園公開研究協議会 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践・研究のまとめ ・実践・研究計画の修正 ・子どもの見取り、子ども理解、授業を通して研究の方向性を確認 ・授業づくり、授業力向上 |
| 3 学期 | <ul style="list-style-type: none"> ・教科部会 | <ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性の確認 ・実践・研究計画の立案 |

通年：年間指導計画及び資質・能力表の加除・修正